

木魂

夢野久作

青空文庫

……俺はどうしてコンナ処に立ち佇まつてゐるのだろう……踏切線路の中^{まんなか}央に突立つて、自分の足下をボンヤリ見詰めているのだろう……汽車が来たら轢^ひき殺されるかも知れないのに……。

そう気が付くと同時に彼は、今にも汽車に轢かれそうな不吉な予感を、背中一面にゾクゾクと感じた。霜^{しも}で真白になつてゐる軌条の左右をキヨロキヨロと見まわした。それから度の強い近眼鏡の視線を今一度自分の足下に落すと、霜^{しもまじ}混りの泥と、枯葉にまみれた兵隊靴で、半分腐りかかつた踏切板をコツンコツンと蹴^けつてみた。それから汗じみた教員の制帽を冠^{かぶ}り直して、古ぼけた詰襟^{めえり}の上衣^{うわぎ}の上から羊羹^{ようかん}色の釣鐘マントを引っかけ直しながら、

タツタ今通り抜けて来た枯木林の向うに透いて見える自分の家の
亞鉛屋根トタンを振り返つた。

……一体俺は、今の今まで何を考えていたのだろう……。

彼はこの頃、持病の不眠症が嵩じた結果、頭が非常に悪くなる
つている事を自覚していた。殊に昨日は正午過ぎから寒さがグン
グン締まつて来て、トテモ眠れそうにないと思われたので、飲め
もしない酒を買って来て、ホンの五勺ばかり冷ひやのまま飲んで眠つ
たせいか、今朝けさになつてみると特別に頭がフラフラして、シクン
シクンと痛むような重苦しさを脳髄の中心に感じているのであつ
た。その頭を絞るように彼は、薄い眉まゆをグツト引寄せながら、爪みづ
先まさきにねばり付いている赤い泥を凝視めた。

……おかしいぞ。今朝は俺の頭がヨツボドどうかしているらし
いぞ……。

……俺は今朝、あの枯木林の中の亞鉛葺トタンぶきの一軒屋の中で、いつもの通りに自炊の後始末をして、野良犬のらが這入はいらないよう ャント戸締りをして、ここまで出かけて来たことは来たに相違ないのだが、しかし、それから今までの間じゅう、俺は何を考えていたのだろう。……何か知らトテモ重大な問題を一生懸命に考え詰めながら、ここまで来たような気もするが……おかしいな。今となつてみるとその重大な問題の内容を一つも思い出せなくなつてゐる……。

……おかしい……おかしい……。何にしても今朝はアタマが変

テコだ。こんな調子では又、午後の時間に居眠りをして、無邪気な生徒たちに笑われるかも知れないぞ……。

彼はそんな事を取越苦労しいしい上衣の内ポケットから大きな銀時計を出してみると、七時四十分キツカリになつていた。

彼はその8の処に固まり合つて いる二本の針と、チツチツチツチツと廻転して いる秒針とを無意識にジーツと見比べていた……が……やがて如何にも淋しそうな……自分自身を嘲るような微苦笑を、度の強い近眼鏡の下に痙攣させた。

……ナーンだ。馬鹿馬鹿しい。何でもないじやないか。

……俺は今学校に出かける途中なんだ。……今朝は学課が初まる前に、調べ残しの教案を見ておかなければならぬと思つて、

午後の時間の睡ねむいのを覚悟の前で、三十分ばかり早めに出て来たのだ。しかも学校まではまだ五基キロ以上あるのだから、愚図愚蠢する^すと時間の余裕が無くなるかも知れない……だから俺はここに立停^{たちど}まって考えていたのだ。国道へ出て本通りを行こうか、それとも近道の線路伝いにしようかと迷いながら突立つっていたものではないか……。

……ナーンだ。何でもないじやないか……。

……そうだ。とにかく鉄道線路を行こう。線路を行けば学校まで一直線で、せいぜい三基キロ米ぐらいしか無いのだから、こころもち急ぎさえすれば二十分ぐらいの節約は訝なく出来る……そうだ……鉄道線路を行こう……。

彼はそう思い思ひ今一度ニンマリと青黒い、鬚だらけの微苦笑をした。三角形に膨らんだボクスの古鞄を、左手にシツカリと抱き締めながら、白い踏切板の上から半身を傾けて、やはり霜を被つている線路の枕木の上へ、兵隊靴の片足を踏み出しかけた。……が……又、ハツと気が付いて踏み留まつた。

彼はそのまま右手をソット額に当てた。その掌で近眼鏡の上を蔽うて、何事かを祈るように、頭をガツクリとうなだれた。

彼は、自身がタツタ今、鉄道踏切の中央に立佇まつていたホントの理由を、ヤツト思ひ出したのであつた。そうして彼を無意識のうちに踏切板の中央へ釘付けにしていた、或る「不吉な予感」を今一度ハツキリと感じたのであつた。

彼は今朝眼を醒まして、あたたかい夜具の中から、冷さつめたい空氣の中へ頭を突き出すと同時に、二日酔らしいタマラナイ頭の痛みを感じながら起き上つたのであつたが、又、それと同時に、その頭の片隅で……俺はきようこそ間違なく汽車に轢き殺されるのだぞ……といったようなハツキリした、氣味の悪い予感を感じながら、冷たい筈かけひの水でシミジミと顔を洗つたのであつた。それから大急ぎで湯を湧わかして、昨夜ゆうべの残りの冷ひやめし飯を搔かきこ込んで、これも昨夜のままの泥靴をそのまま穿いて、アルミの弁当箱を詰めた黒い鞄を抱え直し抱え直し、落葉まじりの霜の廃道を、この踏切板の上まで辿たどつて来たのであつたが、そこで真白い霜に包まれた踏切板の上に、自分の重たい泥靴がベタリと落ちた音を耳にす

ると、その一刹那^{せつな}に今一度、そうした不吉な、ハツキリした予感と、その予感に脅^{おび}やかされつつある彼の全生涯とを、非常な急速度で頭の中に廻転させたのであつた。そうしてそのまま踏切を横切つて、大急ぎで国道を廻^{まわ}ろうか。それとも思い切つて鉄道線路を伝つて行こうかと思い迷いながらも、なおも石像のように考え込んでいる自分自身の姿を眼の前に幻視しつつ、そうした気味の悪い予感に襲われるようになつた、そのソモソモの不可思議な因縁^{いんねん}を考え出そう考え出そうと努力しているのであつた。

彼がこうした不可思議な心理現象に襲われ始めたのは昨日今日^{きのうきょう}の事ではなかつた。

昨年の正月から二月へかけて彼は、最愛の妻と一人子を追い繼ぎに亡くしたのであつたが、それからというものは彼は殆んど毎朝のように……きょうこそ……今日こそ間違ひなく汽車に轢き殺される……といったような、奇妙にハッキリした予感を受け続けて来たものであつた。しかし、それでもそのたんびに頭の単純な彼は、一種の宿命的な気持ちを含んだ真剣な不安に襲われながらも、踏切の線路を横切るたんびに、恐る恐る左右を見まわし見まわし、国道伝いに往復したせいであつたろう。夕方になると、そんな不安な感じをケロリと忘れて、何事もなく山の中の一軒屋に帰つて來るのであつた。そうして無けなしの副食おかず物と鍋飯なべめしで、貧しい夕食を済ますと、心の底からホツとした、一日の労苦を忘

れた気持ちになつて、彼が生涯の楽しみにしている「小学算術教科書」の編纂へんさんに取りかかるのであつた。

しかし彼は、そうした不思議な心理現象に襲われる原因を、彼自身の神経衰弱のせいとは決して思つていなかつた。むしろ彼が子供の時分から持つてゐる一種特別の心理的な敏感さが、こうした神秘的な予感の感受性にまで変化して來たものと思い込んでいた。

……という理由は、ほかでもなかつた。

彼は、そうした意味で彼自身が、一種特別の奇妙な感受性の持主に相違ない……と信じ得る色々な不思議な体験を、十分……十分に持つていたからであつた。

彼は元来、年老いた両親の一人息子で、生れ付きの虛弱児童であつたばかりでなく、一種の風変りな、孤獨を好む性質たちであつたので、学校に行つても他の生徒と遊び戯たわむれた事なぞは殆んど無かつた。その代りに学校の成績はいつも優等で、腕白連中に憎まれたり、いじめられたりする場合が多かつたので、学校が済んで級長の仕事が片付くと、逃げるよう家に帰つて、門口から一歩も外に出ないような状態であつた。

けれども極く稀まれにはタツタ一人で外に出ることも無いではなかつた。それはいつでも極く天氣のいい日に限られていて、行く先も山の中にきまり切つていた。……という理由は外ほかでもない。彼は生れつき山の中が性しょうに合つているらしいので、現在でもわざわ

ざ学校から懸け離れた山の中の一軒屋に住んで、不自由な自炊生活をしている位であるが、こうした彼の孤独好きの性癖は既に既に、彼の少年時代から現われていたのであろう。青い空の下にクツキリと浮き立つた山々の木立を、お縁側から眺めていると、子供心に呼びかけられるような気持になつた。一方に彼の両親も亦、また

引っこみ勝ちな彼の健康のために良いとでも思つたのであろう。そんな時には喜んで外出を許してくれたので、彼は中学校の算術教程とか、四則三千題とかいったようなものを一二冊ふところに入れて、近所の悪たれどもの眼を避けながら、程近い郊外を山の方へ出かけたものであつた。

それは十や十一の子供としてはマセ過ぎた散歩であつたが、そ

れでも山好きの彼にとつては、この上もない楽しみに違ひなかつた。彼はそうした散歩のお蔭で、そこいらの山の中の小径こみちという小径を一本残らず記憶おぼえ込んでしまつていた。どこにはアケビの蔓つるがあつて、どこには山の芋いもが埋まつてゐる。人間の顔によく似た大岩がどこの藪やぶの中には在つて、一ひと股ふたまたになつた幹の間から桜の木を生やした大榎えのきはどこの池の縁に立つてゐるという事まで一々知つていたのは恐らく村中で彼一人であつたろう。

ところで彼は、そんな山歩きの途中で、雑木林の中なんぞに、思いがけない空地を発見する事がよくあつた。それは大抵、一反歩んぶか二反歩ぐらいの広さの四角い草原で、多分屋敷か、畠はたけの跡だらうと思われる平地であつたが、立木や何かに蔽おおわれているため

に幾度も幾度も近まわりをウロ付きながら、永い事気付かずに入
るような空地であつた。そのまん中に立ちながら、そこいら中を
キヨロキヨロ見まわしていると、山という山、丘という丘が、ど
こまでもシイーンと重なり合つていて、彼を取り囲む立木の一本
一本が、彼をジイツと見守つてているように思われて来る。足の下
の枯葉がプチプチと微かすかな音を立てて、何となく薄氣味が悪くな
る位であつた。

そんな処を見付けると彼は大喜びで、その空地の中央の枯草に
寝ころんで、大好きな数学の本を拡げて、六ヶ『むづか』しい問
題の解き方を考えるのであつた。もちろん鉛筆もノートも無しに空
間で考えるので、解き方がわかると、あとは暗算で答を出すだけ

であつたが、両親から呼ばれる氣づかいは無いし、隣近所の物音も聞こえないのだから、頭の中が硝子のよう澄み切つて来る。
 それにつれて家ではどうしても解けなかつた問題が、スラスラと他愛もなく解けて行くので、彼はトテモ愉快な気持になつて時間の経つのを忘れていることが多かつた。

ところが、そんな風に数学の問題に頭を突込んで一心になつている時に限つて、思いもかけない背後の方から、ハツキリした声で……オイ……と呼びかける声が聞こえて、彼をビックリさせる事がよくあつた。それは、むろん父親の声でもなければ先生の声でも、友達の声でもない。誰の声だか全くわからなかつたが、しかし非常にハツキリしていた事だけは事実であつた。ダシヌケに

大きな声で……ウオイ……という風に……。だから彼はビツクリして跳ね起きながら振り返つてみると誰も居ない。雑木林がカーッと西日に輝いて、鳥の声一つ聞こえないのであつた。

それは実に不思議な、神秘的な心理現象であつた。最初のうち彼は、そんな声を聞くたんびに髪の毛がザワザワとしたものであつたが、しかし、それは一時的の神経作用といったようなものではなかつたらしく、その後も同じような……又は似たような体験を幾度となく繰返したので、彼はスツカリ慣れっこになつてしまつたのであつた。

彼が、やはり数学の問題を考え考えしながら、山の中の細道をどこまでもどこまでも歩いて行くと、いつからともなく向うの方

から五六人か七八人位の人数でガヤガヤと話しながら、こつちの方へ来る声が聞こえ初める。もちろんその道が一本道になつていることを彼は知つてゐるし、遣つて来る連中は大人に違ひないのでから、その連中に行遭ゆきあつたら、道傍みちばたの羊齒しだの中へでも避けてやる氣で、やはり数学の問題を考え考え一本道を近付いて行くと、不思議なことにどこまで行つてもその話声の主人公の大人たちに行き遭わない。何だか可笑おかしい。変だな……と思ううちに、その細い一本道はおしまいになつて、広い広い田圃たんぼを見晴らした国道の途中か何かにヒヨツコリ出てしまうのであつた。ちょうど向うから来ていた大勢の人間が、途中で虚空こくうに消え失せたような気持であつた。

それは決して氣のせいでもなければ神經作用とも思えなかつた。たしかに、そんな声が聞こえるのであつた。ちようど一心に考え詰めているこちらの暗い氣持と正反対の、明るいハツキリした声が聞こえて來るので、氣にかけるともなく氣にかけていると、そのうちに何かしらハツと氣が付くと同時に、その声もフツツリと消え失せるような場合が非常に多いのであつた。

しかし元来が風変りな子供であつた彼は、そんな不可思議現象を、ソツクリそのまま不可思議現象として受入れて、山に行くのを氣味悪がつたり、又は両親や他人に話して聞かせるような事は一度もしなかつた。そのうちに大きくなつたら解かる事と思つて、自分一人の秘密にしたまま、忘れるともなく次から次に忘れてい

た。そうして彼は、それから後、中学から高等学校を経て、大学から大学院まで行つたのであるが、そのうちに彼の両親は死んでしまつた。それから妻のキセ子（ちら）を貰つたり、太郎という長男が生まれたり、又は学士から、小学教員になりたいというので、色々と面倒な手続きをして、ヤツトの思いで現在の小学校に奉職する事が出来たりしたものであつたが、それ迄の間というもの学校の図書館や、人通りの無い国道や、放課後の教室の中なぞでも、幾度となくソンナような知らない声から呼びかけられる経験を繰返したのであつた。

しかし彼は、そんな体験を他人に話したことは依然として一度も無かつた。ただそのうちにだんだんと年を取つて来るにつれて、

時々そんな事実にぶつかるたんびに、いくらかずつ氣味が悪くなるくなつて来たことは事実であつた。……こんな体験を持つてゐる人間は事に依よると俺ばかりじやないかしらん。……他人がこんな不思議な体験をした話を、聞いたり読んだりした事が、今までに一度も無いのは何故だらう。^{なぜ}……俺は小さい時から一種の精神異状者に生れ付いているのじやないか知らん……なぞと内々^{ないない}で氣を付けるようになつたものである。

ところが、そのうちに、ちょうど十二三年ばかり前の結婚当時の事、宿直の退屈凌ぎに、学校の図書室に這入り込んで、室の隅に積み重ねて在る「心靈界」という薄ツペラな雑誌を手に取りながら読むともなく読んでいると、思いがけもなく自分の体験にピ

ツタリし過ぎる位。ツタリした学説を発見したので、彼はドキンとする程驚ろかされたものであつた。

それは旧露西亞のモスクー大学に属する心靈学界の非壳雜誌に發表された新學説の抄訳紹介で「自分の魂に呼びかけられる實例」と題する論文であつたが、それを読んでみると、正体の無い声に呼びかけられた者は決して彼一人でないことがわかつた。

「……何にも雜音の聞こえない密室の中とか、風の無い、シンとした山の中なぞで、或る事を一心に考え詰めたり、何かに気を取られたりしている人間は、色々な不思議な声を聞くことが、よくあるものである。現にウラルの或る地方では「木魂すだまに呼びかけられると三年経たたぬうちに死ぬ」という伝説が固く信じられている

位であるが、しかもその「スダマ」、もしくは「主の無い声」の正体を、心靈学の研究にかけてみると何でもない。それは自分の靈魂が、自分に呼びかける声に外ならないのである。^{ほか}

すなわち一切の人間の性格は、ちょうど代数の因子分解と同様な方式で説明出来るものである。換言すれば一個の人間の性格といふものは、その先祖代々から伝わつた色々な根性……もしくは魂の相乗積に外ならないので、たとえば $(A_2 + B_2)$ という性格は $(A + B)$ という父親の性格と $(A - B)$ という母親の性格が遺伝したもののが相乗積に外ならない……と考えられるようなものである。ところでその $(A_2 - B_2)$ という全性格の中でも $(A - B)$ という「因子」……換言すれば母親から遺伝した、たとえ

ワソフアクター

ば「数学好き」という魂が、その（A—B）的傾向……すなわち数学の研究慾に凝り固まつて、どこまでも他の魂の存在を無視して、超越して行こうとするような事があると、アトに取り残された（A+B）という魂が、一人ポツチで遊離したまま、徐々と、又は突然に一種の不安定的な心靈作用を起して（A—B）に呼びかける……つまり一時的に片寄った（A—B）的性格を（A+B）の方向へ呼び戻して、以前の全性格（A₂—B₂）の飽和状態に立ち帰らせるべくモーションをかけるのだ。その魂の呼びかけが、そつくりそのまま声となつて錯覚されるので、その声が普通の鼓膜から来た声よりズット深い意識にまで感じられて、人を驚かせ、怪しませるのは当然のことでなければならぬ」

といつたような論法で、生物の外見の上に現われる遺伝が、組合式、一列式、並列式、又は等比、等差などいう数理的な配合によつて行われているところから説き初めて、精神、もしくは性格、習慣などいう心靈関係の遺伝も同様に、数理的の原則によつて行われている事実にまで、幾多の犯罪者の家系を実例に挙げて説き及ぼしている。それから天才と狂人、幽靈現象、千里眼、予言者などいう高等数学的な心理の分解現象の実例を、詳細に瓦わたりつて数理的に説明して在つたが、その中でも特別に彼がタタキ付けられた一節は、普通人と、天才と、狂人の心理分解の状態を、それぞれ数理的に比較研究する前提として掲げてある、次のように解説であつた。

「……天才とか狂人とかいうものは詰まるところ、そうした自分の性格の中の色々な因子の中の或る一つか二つかを、ハツキリと遊離させる力が意識的、もしくは無意識的（病的）に強い人間を指して云うので、天才が狂人に近いという俗説も、斯様に觀察して來ると、極めて合理的に説明されて來るのである。……太陽を描いて発狂したゴホや、モナ・リザの肖像を見て気が変になつた数名の画家なぞはその好適例である。すなわち自分の魂をその絵に傾注し過ぎて、モトの通りのシツクリした性格に帰れなくなつたので、その結果スツカリ分裂して遊離してしまつた個々別々の自分の魂から、夜も昼も呼びかけられるようになつてしまつたのだ。

……又、ベクリンという画伯は、自分に呼びかける自分の魂の姿を、骸骨がバイオリンを弾いている姿に描きあらわして不朽の名を残したものである。

……又、これを普通人の例に取つて見ると、身体からだが弱かつたり、年を老とつて死期が近付いたりした人間は、認識の帰納力とか意識の綜合力とかいったような中心主力ドミナントが弱つて来る結果、意識の自然分解作用がポツポツあらわれ初める。時々、どこからか自分の声に呼びかけられるようになる。だから身体が弱かつた場合か、又は相當年を老つた人間で、正体の無い声に呼びかけられるような事があつたならば、自分の死期の近づいた事に就いて慎重なる考慮をめぐらすべきである」云々……。

この論文の一節を読んだ時に彼は、思わずゾツとして首を縮めさせられた。生れ付き虚弱な上に、天才的な、極度に気の弱い性格を持つている彼が、そうした不可思議な現象に襲われる習慣を持っているのは、当然過ぎる位当然な事と思わせられた。そしてそれ以来、普通人よりも天才とか狂人とかいう者の頭の方が合理的に動いているものではないか知らんと、衷ちゅう心うしんから疑い出す一方に、時折り彼を呼びかけるその声が、果して自分の声だかどうかを、的確に聞き分けてやろうと思つて、ショツチユウ心掛けていたものであつた。

ところが、ここに又一つの奇蹟が現われた……というのは外で

もない。その本を読んでからというもの、彼はどうしたものか、一度もそんな声にぶつからなくなってしまった事であった。ちょうど正体を看破された幽霊か何ぞのよう、自分を呼びかける自分の声が、ピッタリと姿を見せなくなつたので、この七八年というものの彼は忘れるともなしにソノ「自分を呼びかける自分の声」のことを忘れてしまつていた。もつともこの七八年というもの彼は、所帯を持つたり、子供は出来たりで、好きな数学の研究に没頭して、自分の魂を遊離させる機会が些^{すく}なかつたせいかも知れなかつたが……。

ところが又、その後になつて、彼の妻と子供が死んで、ホントウの一人ポツチになつてしまふと、不思議にも今云つたような心

理現象が又もやハツキリと現われ出して、彼を驚かし始めたのであつた。のみならずその声が彼にとつては實にたまらない、身を切るような痛切な形式でもつて襲いかかりはじめたので、彼はモウその声に徹底的にタタキ付けられてしまつて、息も吐ぬかれない眼に会わせられることになつたのであるが、しかも、そんな事になつたそのソモソモの因縁を彼自身によくよく考え廻わしてみると、それはどうやら彼の亡くなつた妻の、異常な性格から発ほつ_{たん}端じして来ているらしく思われたのであつた。

彼の亡くなつた妻のキセ子というのは元來、彼の住んでい村の村長の娘で、この界隈かいわいには珍らしい女学校卒業の才媛さいえんであつたが、容貌ようぼうは勿論のこと、氣質じんじょうまでが尋常じんじょう一樣の変り

方ではなかつた。彼が堂々たる銀時計の学士様でいながら、小学校の生徒に数学を教えたのが一パイで、無理やりに自分の故郷の小学校に奉職しているのに、その横合いから又、無理やりに彼の意気組に共鳴して、一所になる位の女だつたので、ただ子供に対する愛情だけが普通と變つていないので、寧ろ不思議な位のものであつた。つまり極度にヒステリックな変態的女丈夫^{じょじょうふ}とでも形容されそうな型^{タイプ}の女であつたが、それだけに又、自分の身体が重い肺病に罹つても、亭主の彼に苦労をかけまいとして、無理に無理を押し通して立働く^{たちはた}らいていたばかりでなく、昨年の正月に血を喀いておれた時にも、死ぬが死ぬまで意識の混濁^{こんだく}を見せなかつたものである。ちょうど十一になつた太郎の頭を撫^なでな

がら、弱々しい透きとおつた声で、

「……太郎や。お前はね。これからお父さんの云付いいつけを、よく守らなくてはいけないよ。お前がお父さんの仰おっしゃ言いる事を肯きかなかつたりすると、お母さんがチヤンとどこからか見て悲しんでりますよ。お父さんが、いつもよく仰言いる通りに、どんなに学校が遅くなつても鉄道線路なんぞを歩いてはいけませんよ」

なんかと冗談のような口調で云い聞かせながら、微笑しいしい息を引き取つたもので、それはシツカリした立派な臨終であつた。

彼はだからその母親が死ぬと間もなく、お通夜つやの晩に、忘れ形見の太郎を引き寄せて、涙ながらに固い約束をしたものであつた。

「……これから決して鉄道線路を歩かない事にしような。お前は

よく友達に誘われると、イヤとも云いかねて、一所に線路伝いをしているようだが、あんな事は絶対に止める事に仕様じやないか。いいかい。お父さんも決して鉄道線路に足を踏み入れないからナ……」

といつたようなことをクドクドと云い聞かせたのであつた。その時には太郎もシクシク泣いていたが、元来柔順な児すなおだつたので、何のコダワリもなく彼の言葉を受け入れて、心からうなずいていたようであつた。

それから後といふのは彼は毎日、昔の通りに自炊をして、太郎を一足先に学校へ送り出した。それから自分自身は跡片付あとかたづけを済ますと大急ぎで支度を整えて、わがこ吾兒の跡を逐おうようにして学校

へ出かけるのであつたが、それがいつも遅れ勝ちだったので、よく線路伝いに学校へ駆け付けたものであつた。

けれども太郎は生れ付きの柔順さで、正直に母親の遺言を守つて、いくら友達に誘われても線路を歩かなかつたらしく、毎日毎日国道の泥やホコリで、下駄げたや足袋あしひを台なしにしていた。一方に彼は、いつもそうした太郎の正直さを見るにつけて……これは無論、俺が悪い。俺が悪いにきまつているのだ。だけど学校は遠いし、余計な仕事は持つてているしで、モトモト自炊の経験はあつたにしても、その上に母親の役目と、女房の仕事が二つ、新しく加わつた訳だから、登校の時間が遅れるのは止むを得ない。だから線路を通るのは万止ばんむを得ないのだ……。

なぞといったような云い訳を毎日毎日心の中で繰り返しているのであつた。当てもない妻の靈に対して、おんなんじような詫びごとを繰返し繰返し良心の呵責を胡麻化しているのであつた。

ところが天罰覲面とはこの事であつたろうか。こうした彼の不正直さが根こそげ曝露する時機が来た。しかし後から考えるとその時の出来事が、後に彼の愛児を惨死させた間接の……イヤ……直接の原因になつてゐると思われない、意外千萬の出来事が起つて、非常な打撃を彼に与えたのであつた。

それはやはり去年の正月の大寒中で、妻の三七日が済んだ翌^{あく}日の事であつたが……。

……ここまで考え方続けて来た彼は、チヨツト鞄を抱え直しながら

ら、もう一度そこいらをキヨロキヨロと見まわした。

そこは線路が、この辺へん一帯いだいを蔽おおうている涯はてもない雑木林の間の空地に出てから間もない処に在る小川の暗渠あんきよの上で、殆ほとんど干上ひあがりかかつた鉄氣水かなけみずの流れが、枯葦かれあしの間の処ところどころ々ごとくにトラホームの瞳に似た微かすかな光りを放つていた。その暗渠の上を通り越すと彼は、いつの間にか線路の上に歩み出している彼自身を怪しみもせずに、今まで考え続けて来た彼自身の過去の記憶を今一度、シンシンと泌しあわせみ渡る頭の痛みと重ね合わせて、チラチラと思いつづけたのであつた。

そのチラチラの中には純粹な彼自身の主觀もあれば、彼の想像から來た彼自身に対する客觀もあつた。暖かい他人の同情の言葉

もあれば、彼の行動を批判する彼自身の冷めたい正義観念も交つていたが、要するにそんなような種々雑多な印象や記憶の断片や残滓さんさいが、早くも考え疲れに疲れた彼の頭の中で、暈かしになつたり、大うつしになつたり、又は二重、絞り、切組きりくみ、逆戻り、トリック、モンタージュの千变万化せんぺんばんかをつくして、或は構成派のような、未来派のような、又は印象派のような場面をゴチャゴチャに渦巻きめぐらしつつ、次から次へと変化し、進展し始めたのであつた。そうして彼自身が意識しえなかつた彼自身の手で、彼のタツタ一人の愛児を惨死に陥れて、彼をホントウの独ひとりボツチにしてしまうべく、不可抗的な運命を彼自身に編み出させて行つた不可思議な或る力の作用を今一度、数学の解式のようにアリアアリ

と展開し始めたのであつた。

それは大寒中には珍らしく暖かい、お天気のいい午後のことであつた。

彼は二三日前から風邪を引いていて、その日も朝から頭が重かつたので、いつもの通り夕方近くまで居残つて学校の仕事をする気がどうしても出なかつた。だから放課後一時間ばかりも経たつと、やはり、何かの用事で居残つていた校長や同僚に挨拶あいさつをしいしい、生徒の答案を一ぱいに詰めた黒い鞄を抱え直して、トボトボと校門を出たのであつた。

ところで校門を出てボプラの並んだ広い道を左に曲ると、彼の

住んでいる山懐^{やまふところ}の傾斜の下まで、海岸伝いに大きな半円を描いた国道に出るのであつたが、しかし、その国道を迂廻^{うかい}して帰るのが、彼にとつては何よりも不愉快であつた。……というのは距離^{のき}が遠くなるばかりでなく、この頃著^{ごろ}しく数を増した乗合自動車やトラック、又は海岸の別荘地に出這^{ではい}入りする高級車の砂ホコリを後から後から浴びせられたり、又は彼を知つている教え子の親たちや何かに出会つてお辞儀をさせられるたんびに、彼の頭の中にフンダンに浮かんでいる数学的な瞑想^{めいそう}を破られるのが、實にたまらない苦痛だからであつた。

ところがこれに反して校門を出てから、草の間の狭い道をコツソリと右に曲ると、すぐに小さな杉森の中に這入つて、その蔭に

在る駅近くの踏切に出る事が出来た。そこから線路伝いに四五町ほど続いた高い堀割の間を通り抜けると、百分の一内外の傾斜線ル^{ほく}路を殆んど一直線に、自分の家の真下に在る枯木林の中の踏切まで行けるので、その途中の大部分は枯木林に蔽われてしまつて、たから、誰にも見付かる気遣い^{きづか}が無いのであつた。

ところで又、彼はその校門の横の杉森を出て、線路の横の赤土道に足を踏み入れると同時に、はるか一里ばかり向うの山蔭に在る自分の家^{うち}と、そこに待つてゐるであろう妻子の事を思い出すのが習慣のようになつていた。その習慣は去年の正月に彼の妻が死んだ後までも、以前と同じように引続いていたのであつたが、しかし彼は、その愚かな心の習慣を打消そとは決してしなかつた。

むしろそれが自分だけに許された悲しい権利でもあるかのよう
に、ツイこの間^{あいだ}まで立ち働いていた妻の病み^{やつ}られた姿や、現在、
先に帰つて待つているであろう吾兒^{わがこ}の元気のいい姿を、それから
それへと眼の前に彷彿^{ほうふつ}させるのであつた。山番小舎のトボトボ
と鳴る筈^{かけひ}の前で、勝氣な眼を光らして米を磨^といでいる妻の横顔や、
自分の姿が枯木立の間から現われるのを待ちかねたように両手を
差し上げて、

「オーケイ。お父さーん」

と呼びかける頬^ほペタの赤い太郎の顔や、その太郎が汲込^{くみこ}んで燃
やし付けた孫風呂の煙が、山の斜面を切れ切れに這^はい上つて行く
形なぞを、過去と現在と重ね合わせて頭の中に描き出すのであつ

た。もつとも時折は、黒い風のような列車の轟音ごうおんを遣り過したあとで、枕木の上に立ち止まつて、バットの半分に火を点けながら、

……又きょうも、おんなじ事を考へてゐるな。イクラ考えたつて、おんなじ事を……。

と自分で自分の心を冷笑した事もあつた。そして四十を越してから妻を亡くした見窄らしい自分自身の姿が、こころもち前屈みになつて歩いて行く姿を、二三十間向うの線路の上に、幻覚的に描き出しながらも……。

……もつともだ。もつともだ。そうした儂はかない追憶に耽ふけるのは、お前のために取残とりのこされているタツタ一つの悲しい特權なのだ。

お前以外に、お前のそうした痛々しい追憶を冷笑し得る者がどこに居るのだ……。

と云いたいような、一種の憤慨に似た誇りをさえ感じつつ、眼の中を熱くする事もあつた。そうして全国の小学児童に代数や幾何の面白さを習得さすべく、彼自身の貴い経験によつて、心血を傾けて編纂しつつある「小学算術教科書」が思い通りに全国の津々浦々にまで普及した嬉しさや、さては又、県視学の眼の前で、複雑な高次方程式に属する四則雜題を見事に解いた教え子の無邪氣な笑い顔なぞを思い出しつつ……云い知れぬ喜びや悲しみに交る交る満たされつつ、口にしたバットの火が消えたのも忘れて行く事が多いのであつた。

「……オトウサン……」

という声をツイ耳の傍で聞いたように思つたのはソンナ時であつた……。

「…………」

ハツと気が付いてみると彼は、その日もいつの間にか平生の習慣通りに、線路伝いに来ていて、ちょうど長い長い堀割の真中あたりに近い枕木の上に立停まつているのであつた。彼のすぐ横には白ペンキ塗ぬりの信号柱が、白地しろじに黒線の這入はいつた横木を傾けて、下り列車が近付いている事を暗示していたが、しかし人影らしいものはどこにも見当らなかつた。ただ彼のみすぼらしい姿を左右から挟んだ、高い高い堀割の上半分に、傾いた冬の日がア

カアカと照り映^はえているその又上に、鋼鉄色の澄み切つた空がズーッと線路の向うの、山の向う側まで傾き蔽^{おお}うているばかりであった。

そんなような景色を見まわしているうちに彼は、ゆくりなくも彼の子供時代からの体験を思い出していた。

……もしや今のは自分の魂が、自分を呼んだのではあるまいか。
……お父さん……と呼んだように思つたのは、自分の聞き違いで
はなかつたろうか……。

といつたような考えを一瞬間、頭の中に廻転させながら、キヨロキヨロとそこいらを見まわしていた。……が、やがてその視線がフツと左手の堀割の高い高い一角に止ると、彼は又もハツと

ばかり固くなつてしまつた。

彼の頭の上を遙かに圧して切り立つてゐる堀割の西側には、更にモウ一段高く、国道沿いの堤堤があつた。その堤の上に最前から突立つて見下していたらしい小さな、黒い人影が見えたが、彼の顔がその方向に向き直ると間もなく、その小さい影はモウ一度、一生懸命の甲かんだか高い声で呼びかけた。

「……お父さアーン……」

その声の反響がまだ消えないうちに彼は、カンニングを発見された生徒のように真赤になつてしまつた。……線路を歩いてはいけないよ……と云い聞かせた自分の言葉を一瞬間に思い出しつつ、わななく指先でバットの吸いさしを抓つまみ捨てた。そうして返事の

声を咽喉^{のど}に詰まらせつつ、辛うじて顔だけ笑つて見せていると、

そのうちに、又も甲高い声が上から落ちて来た。

「お父さアン。きょうはねえ。残つて先生のお手伝いして来たんですよオ——。書取りの点をつけてねえ……いたんですよオ——

……」

彼はヤツトの思いで少しばかりうなずいた。そして吾兒^{わがこ}が入学以来ズット引続いて級長をしていることを、今更ながら気が付いた。

同時にその太郎が時々担当の教師に残されて、採点の手伝いをさせられる事があるので……ソンナ時は成るたけ連れ立つて帰ろうね……と約束していた事までも思い出した彼は、どうする事も出来ないタマラナイ面目なさに縛られつつ、辛うじて阿弥陀^{あみだ}

になつた帽子を引直しただけであつた。

「……オトウサーアアーンン……降りて行きましようかアア……」
という中に太郎は堤の上をズンズンこちらの方へ引返して來た。

「イヤ……俺が登つて行く……」

狼狽ろうぱいした彼はシャガレた声でこう叫ぶと、一足飛びに線路の横の溝を飛び越えて、重たい鞄を抱え直した。四十五度以上の急斜面に植え付けられた芝草の上を、一生懸命に攀よじ登り始めたのであつた。

それは労働に慣れない彼にとつては實に死ぬ程の苦しい体験であつた。振返るさえ恐しい三丈じょうあまりの急斜面を、足首の固い兵

隊靴の爪先つまさきと、片手の力を便りにして匍はい登つて行くうちに、
 彼は早くも膝ひざがしだる頭かしらがガクガクになる程疲れてしまつた。崖がけの中
 途に乱生した冷めたい草の株を掴つかむたんびに、右手の指先の感覚
 がズンズン消え失せて行くのを彼は自覺した。反対に彼の顔は流
 るる汗と水漥みずばなに汚れ噎むせて、呼吸いきが詰まりそうになるのを、ど
 うする事も出来ないながら、彼は子供の手前を考えて、大急ぎ
 に斜面を登るべく、息も吐かれぬ努力を続けなければならなかつ
 た。

……これは子供に唾つばを吐いた罰ばちだ。子供に禁じた事を、親が犯
 した報いだ。だからコンナ責苦せめぐに遭うのだ……。

といったような、切ない、情ない、息苦しい考えで一杯になり

ながら、上を見る暇もなく斜面に縋り付いて行くうちに、疲れ切つてブラブラになつた足首が、兵隊靴を踏み返して、全身が草のよう^{すが}にブラ下がつたままキリキリと廻転しかけた事が二三度あつた。その瞬間に彼は、眼も遙かな下の線路に大の字形にタタキ付けられている彼自身の死骸を見下したかのように、魂のドン底までも縮み上らせられたのであつたが、それでもなお死物狂いの努力で踏みこたえつつ大切な鞄を抱え直さなければならなかつた。

「あぶない。お父さん……お父さアン……」

と叫ぶ太郎の声を、すぐ頭の上で聞きながら……。

……堤^どの上に登つたら、直ぐに太郎を抱き締めてやろう。気の済むまで謝罪^{あやま}つてやろう……。そうして家^{うち}に帰つたら、妻の位牌^{いはい}

の前でモウ一度あやまつてやろう……。

は

そう思い詰め思い詰め急斜面の地獄を匍い登つて來た彼は……
 しかし……平たい、固い、砂利ざりだけの国道の上に吾兒わがこと並んで
 立つと、もうソンナ元気は愚かなこと、口を利く力さえ尽き果て
 ていることに気が付いた。薄い西日を前にして大浪を打つ動悸どうきと
 呼吸の嵐の中にあらゆる意識力がバラバラになつて、グルグルと
 渴卷いて吹き散らされて行くのをジイーツと凝視みて佇んでいる
 うちに、眼の前の薄黄色い光りの中で、無数の灰色の斑点はんてんがユ
 ラユラチラチラと明滅するのを感じていた。それからヤツト氣を取り直して、太郎に鞆を渡しながら、幽靈のようにヒヨロヒヨロ
 と歩き出した時の心細かつたこと……。そのうちに全身を濡れ流ぬ

れた汗が冷え切つてしまつて、タマラナイ悪寒おかんがゾクゾクと背筋せきんを這はいまわり始めた時の情なかつたこと……。

彼は山の中の一軒屋に帰ると、何もかも太郎に投げ任せたまま直ぐに床を取つて寝た。そしてその晩から彼は四十度以上の高い熱を出して重態の肺炎あえに喘ぎつつ、夢うつつの幾日かを送らなければならなかつた。

彼はその夢うつつの何日目かに、眼の色を変えて駆け付けて来た同僚の橋本訓導の顔付を記憶していた。その後から駆け付けて来た巡査や、医者や、村長さんや、区長さんや、近い界隈かいわいの百姓たちの只ただごと事ならぬ緊張した表情を不思議なほどハツキリ記憶

していた。のみならずそれが太郎の死を知らせに来た人々で……。

「コンナ大層な病人に、屍体を見せてええか悪いか」

「知らせたら病氣に障りはせんか」

といつたような事を、土間の暗い処でヒソヒソと相談している事実や何かまでも、慥かに察して いるにはいた。けれども彼は別に驚きも悲しみもしなかつた。おおかたそれは彼の意識が高熱のために朦朧^{もうろう}状態に陥っていたせいであろう。ただ夢のように……。

……そうかなあ……太郎は死んだのかなあ……俺も一所にあの世へ行くのかなあ……。

と思いつつ、別に悲しいという気もしないまま、生ぬるい涙を

あとからあとから流しているばかりであつた。

それからもう一つその翌^{あく}る日のこと……かどうかよくわからな
いが、ウツスリ眼^{まなこ}を醒ました彼は囁^{ささ}やくような声で話し合つてい
る女の声をツイ枕元の近くで聞いた。ちようどラムプの芯^{しん}が極度
に小さくして在つたので、そこが自分の家であつたかどうかすら
判^{はつきり}然しなかつたが、多分介抱のために付添つていた、近くの部
落のお神さん達が何かであつたろう。

「……ホンニまあ。坊ちゃんは、ちょうどあの堀割のまん中の信
号の下でなあ……」

「……マアなあ……お父さんの病気が気にかかつたかしてなあ：
……先生に隠れて鉄道づたいに近道きつしやつたもんじやろうて皆

云ごい御座ざるげなが……

「……まあ。可愛かあいそうになあ……。あの雨風の中になあ……」

「それでなあ。とうとう坊ちゃんの顔はお父さんに見せずに火葬ばしてしまったて、なあ……」

「……何という、むごい事かいなあ……」

「そんでなあ……先生が寝付かつしやつてから、このかた毎日坊ちゃんに御飯をば喰べさせよつた学校の小使いの婆ばあさんがなあ。代られるもんなら代ろうがて云うてなあ。自分の孫が死んだばしのごと歎なげいてなあ……」

あとはスツスツという啜り泣きの声が聞こえるばかりであつたが、彼はそれでも別段に気に止めなかつた。こうした言葉の意味

を考える力も無いままに又もうとうとしかけたのであつた。

「橋本先生も云うて御座つたけんどなあ。お父さんもモウこのま
ま死んで終わつしやつた方が 幸福かも知れんち云うてなあ……」

といつたようなボソボソ話を聞くともなく耳に止めながら……
自分が死んだ報せを聞いて、口をアングリと開いたまま、眼をパ
チパチさせている人々の顔と、向い合つて微笑しながら……。

けれどもそのうちに、さしもの大熱が奇蹟的に引いてしまうと、
彼は一時、放神状態に陥つてしまつた。和尚おしょうさんがお経を読み
に來ても知らん顔をして縁側に腰をかけていたり、妻の生家から
見舞いのために配達させていた豆乳とうにゅうを一本も飲まなかつたり
していたが、それでも学校に出る事だけは忘れなかつたと見えて、

体力が出て来ると間もなく、何の予告もしないまま、黒い鞄を抱え込んでコツコツと登校し始めたのであつた。

教員室の連中は皆驚いた。見違えるほど寝れ果てた顔に、著しく白髪の殖えた無精鬚を蓬々と生やした彼の相好を振り返りつつ、互いに眼と眼を見交した。その中にも同僚の橋本訓導は、眞先に椅子から離れて駆け寄つて来て、彼の肩に両手をかけながら声を潤ませた。

「……どうしたんだ君は。……シシリシリツカリしてくれ
給え……」

眼をしばたきながら、椅子から立ち上つた校長も、その横合いから彼に近付いて來た。

「……どうか充分に休んでくれ給え。吾々や父兄は勿論のこと、
学務課でも皆、非常に同情しているのだから……」

と赤ん坊を諭すように背中を撫でまわしたのであつたが、しかし、そんな親切や同情が彼には、ちつとも通じないらしかった。

ただ分厚い近眼鏡の下から、白い眼でジロリと教室の内部を見廻わしただけで、そのまま自分の椅子に腰を卸すと、彼の補欠をしていた末席の教員を招き寄せて学科の引継を受けた。そうして乞食のように見窄らしくなつた先生の姿に驚いている生徒たちに向つて、ポツポツと講義を始めたのであつた。

それから午後になつて教員室の連中から、

「無理もない」

というような眼付きで見送られながら校門を出るとそのまま右に曲つて、生徒たちが見送っているのも構わずにサッサと線路を伝い始めたのであつた。……又も以前の通りの思^{おもいで}出を繰返しつつ、……自分の帰りを待つてゐるであろう妻子の姿を、木の間隠^{こま}れの一軒屋の中に描き出しつつ……。

彼はそれから後、来る日も来る日もそうした昔の習慣を判で捺^おしたように繰返し始めたのであつたが、しかしその中にはタツタツ以前と違つてゐる事があつた。それは学校を出てから間もない堀割の中程に立つてゐる白いシグナルの下まで来ると、おきまりのようにチョット立止まつて見る事であつた。

彼はそうしてそこいらをジロジロと見廻しながら、吾兒^{わがこ}の轢^ひか

れた遺跡らしいものを探し出そうとするつもりらしかつたが、既に幾度も幾度も雨風に洗い流された後なので、そんな形跡はどこにも発見される筈が無かつた。

しかし、それでも彼は毎日毎日、そんな事を繰り返す器械か何ぞのよう、おんなんじ處に立ち佇どまつて、くり返しきり返しおんなじ處を見まわしたので、そこいらに横たわっている数本の枕木の木目や節穴、砂利の一粒一粒の重なり合い、又はその近まわりに生えている芝草や、野茨のいばらの枝ぶりまでも、家に帰つて寝る時に、夜具の中でアリアリといい出し得るほど明確に記憶してしまつた。そうして彼はドンナニ外の考ほかえで夢中になつてゐる時でも、シグナルの下のそのあたりへ来ると、殆ほとんど無意識に立たち佇どまつて、

そこいらを一渡り見まわした後でなければ、一步も先へ進めない
ようにスッカリ癖づけられてしまつたのであつた……何故そこに
立佇まつてゐるのか、自分自身でも解らないままに、暗い暗い、
淋しい淋しい気持ちになつて、狃染みの深い石ころの形や、枕木
の切口の恰好や、軌条の継目の間隔を、一つ一つにジーツと見
守らなければ気が済まないのであつた…………。

「お父さん」

というハツキリした声が聞こえたのは、ちょうど彼がそうして
いる時であつた。

彼はその声を聞くや否や、電気に打たれたようにハツと首を縮めた。無意識のうちに眼をシツカリと閉じながら、肩をすぼめて

固くなつたが、やがて又、静かに眼を見開いて、オズオズと左手の高い処を見上げた。寂しい霜枯れの草に蔽われた赤土の斜面と、その上に立つている小さな、黒い人影を予想しながら……。

ところが現在、彼の眼の前に展開している堀割の内側は、そんな予想と丸で違つた光景をあらわしていた。見渡す限り草も木も、燃え立つような若緑に蔽われていて、色とりどりの春の花が、巨大な左右の土の斜面の上を、涯^はてしまなく群がり輝やき、流れ漾^{ただよ}い、乱れ咲いていた。線路の向うの自分の家を包む山の斜面の中程には、散り残つた山桜が白々と重なり合つていた。朗らかに晴れ静まつた青空には、洋紅色^{ローズマダ}の幻覚をほのめかす白い雲がほのぼのとゆらめき渡つて、遠く近くに呼びかわす雲雀^{ひばり}の声や、頬^{ほおじ}

白の声さえも和やかであつた。

……その中のどこにも吾児らしい声は聞こえない……どこの物蔭にも太郎らしい姿は発見されない……全く意外千万な眩ぶしさと、華やかさに満ち満ちた世界のまん中に、昔のまんまの見窄らしい彼自身の姿を、タツタ一つポツネンと発見した彼……。

……彼がその時に、どんなに奇妙な声を立てて泣き出したか……それから、どんなに正体もなく泣き濡れつつ線路の上をよろめいて、山の中の一軒屋へ帰つて行つたか……そうして自分の家に帰り着くや否や、簾筈^{たんす}の上に飾つてある妻子の位牌^{いはい}の前に這^はいぢりまわり、転がりまわりつつ、どんなに大きな声をあげて泣き崩れたか……心ゆくまで泣いては詫^わび、あやまつては慟^{とうこく}哭したか

……。そうして暫くしてからヤツト正氣付いた彼が、見る人も、聞く人も無い一軒屋の中で、そうしている自分の恰好の見つともなさを、気付き過ぎる程気付きながらも、ちつとも恥かしいと思わなかつたばかりでなく、もつともつと自分を恥かしめ、苛なみ苦しめてくれ……というように、白木しらきの位牌を二つながら抱き締めて、どんなに頬ほおずりをして、接吻せつぶんしつつ、あこがれ歎いたことか……。

「……おお……キセ子……キセ子……俺が悪かつた。重々悪かつた。
堪忍かんにん……堪忍してくれ……おおつ。太郎……太郎太郎。お父さんが……お父さんが悪かつた。モウ……もう決して、お父さんは線路を通りません……通りません。……力……堪忍して……」

堪忍して下さアアア——イ……」

と声の涸かれるほど繰返し繰返し叫び続けたことか……。

彼は依然として枯木林の間の霜しもの線路を渡りつづけながら、その時の自分の姿をマザマザと眼の前に凝視した。その瞼まぶたの内側が自おのずと熱くなつて、何ともいえない息苦しい塊かたまりが、咽喉のどの奥から、鼻の穴の奥の方へギクギクとコミ上げて来るのを自覚しながら……。

「……アツハツハ……」

と不意に足の下で笑う声がしたので、彼は飛び上らむばかりに驚いた。思わず二三歩走り出しながらギックリと立ち佇どまって、

汗ばんだ額ひたいを撫なで上げつつ線路の前後を大急ぎで見まわしたが、勿論、そこいらに人間が寝ている筈は無かつた。薄霜を帶びた枕木と濡れたレールの連続が、やはり白い霜を冠かつた礫の大群の上に重なり合つてゐるばかりであつた。

彼の左右には相も變らぬ枯木林が、奥もわからぬ程立ち並んで、黄色く光る曇り日の下に灰色の梢こずえを煙らせていた。そうしてその間をモウすこし行くと、見晴らしのいい高い線路に出る白い標識レベルの前にピツタリと立佇たゞみつてゐる彼自身を発見したのであつた。

「……シマツタ……」

と彼はその時口の中であぶやいた。……あれだけ位牌いはいの前で誓つたのに……済まない事をした……と心の中で思つても見た。け

れども最早もはや取返しの付かない処まで来ている事に気が付くと、シツカリと奥歯かを噛み締めて眼を閉じた。

それから彼は又も、片手をソッと額に当てながら今一度、背後うしろを振り返つてみた。ここまで伝つて来た線路の光景と、今まで考え続けて来た事柄を、逆にさかのぼつて考え出そうと努力した。

あれだけ真剣に誓い固めた約束を、それから一年近くも過ぎ去つた今朝に限つて、こんなに訳もなく破つてしまつたそのそもそもの発端の動機を思い出そうと焦燥あせつたが、しかし、それはモウ十年も昔の事のように彼の記憶から遠ざかつていて、どこをドンナ風に歩いて來たか……いつの間に帽子を後ろ向きに冠り換えたか……鞄を右手に持ち直したかという事すら考え出すことが出来な

かつた。ただズツト以前の習慣通りに、鞄を持ち換え持ち換え線路を伝つて、ここまで来たに違ひ無い事が推測されるだけであつた。…………しかしその代りに、たつた今ダシヌケに足の下で笑つたものの正体が彼自身にわかりかけたようと思つたので、自分の背後の枕木の一つ一つを念を入れて踏み付けながら引返し始めた。すると間もなく彼の立佇たちどまつていた処から四五本目の、古い枕木の一方が、彼の体重を支えかねてグイグイと砂利ざりの中へ傾き込んだ。その拍子に他の一端が持ち上つて軌条の下縁とスレ合いながら……ガガガ……と音を立てたのであつた。

彼はその音を聞くと同時に、タツタ今笑い声の正体がわかつたので、ホツと安心して溜息ためいきを吐いた。それにつれて気が弛んゆる

だらしく、頭の毛が一本一本ザワザワザワとして、身体中にゾヨゾヨと鳥肌が出来かかつたが、彼はそれを打消すように肩を強くゆすり上げた。黒い鞄を二三度左右に持ち換えて、切れるように冷めたくなつた耳^{みみ}朶^{たぼ}をコスリまわした。それから鼻息の露^{つゆ}に濡^ぬれた胡^ご麻^ま塩^{しお}鬚^{ひげ}を撫^なでまわして、歪^{ゆが}みかけた釣鐘マントの襟^{えり}をゆすり直すと、又も、スタスターと学校の方へ線路を伝い始めた。いつも踏切の近くで出会う下りの石炭列車が、モウ来る時分だと思い、何度も何度も背後^{うしろ}を振り返りながら……。

彼は、それから間もなく、今までの悲しい思い出からキレイに切り離されて、好きな数学の事ばかりを考えながら歩いていた。
おもいで

彼自身にとつて最も幸福な、数学づくめの冥想^{めいそう}の中へグングンと深入りして行つた。

彼の眼には、彼の足の下に後から後から現われて来る線路の枕木の間ごとに変化して行く礫石^{バラス}の群れの特徴が、ずっと前に研究しあけたまま忘れかけている函数論や、プロバビリチーの証明そのもののように見えて來た。彼は又、枕木と軌条が擦れ合つた振動が、人間の笑い声に聞こえて來るまでの錯覚作用を、数理的に説明すべく、しきりに考え廻わしてみた。それは何の不思議もない簡単な出来事で、考えるさえ馬鹿馬鹿しい事實であつたが、しかしその簡単な枕木の振動の音波が人間の鼓膜に伝わつて、脳髄に反射されて、全身の神経に伝わつて、肌を粟立^{あわだ}たせるまでの経

路を考えて来ると、最早、数理的な頭ではカイモク見当の付けようの無い神秘作用みたようなものになつて行くのが、重ね重ね腹が立つて仕様がなかつた。人間が機関車に正面すると、ちょうど蛇に魅入られた蛙のように動けなくなつて、そのまま、轢殺されてしまうのも、やはり脳髄の神秘作用に違ひ無いのだが……。一体脳髄の反射作用と、意識作用との間にはドンナ数理的な機構の区別が在るのだろう……。

……突然……彼の眼の前を白いものがスースと横切つたので、彼は何の気もなく眼をあげてみた。……今頃白い蝶^{ちよう}が居るか知らんと不思議に思いながら……けれどもそこいらには蝶々らしいものは愚か、白いものすら見えなかつた。

彼はその時に高い、見晴らしのいい線路の上に来ていた。

彼の視線のはるか向うには、線路と一直線に並行して横たわっている国道と、その上に重なり合つて並んでいる部落の家々が見えた。それは彼が昔から見慣れている風景に違ひ無いのであつたが、今朝はどうした事かその風景がソックリそのまんまに、数学の思索の中に浮き出て来る異常なフラツシュバツクの感じに変化しているように思われた。その景色の中の家や、立木や、はたけ畠や、電柱が、数学の中に使われる文字や符号…… $\sqrt{}$, ||, 0, 8, KL M, XYZ, $\alpha \beta \gamma$, $\theta \omega$, π ……なんどに変化して、三角函数が展開されたように……高次方程式の根こんが求められた時の複雑な分式のように……薄黄色い雲の下に神秘的なハレーションを起し

つつ、涯はてしもなく輝やき並んでいた。形に表わす事の出来ない
イマジナリ―・ナンバー―や、無理数や、循環かたじゅんかん 少数なぞを数限
りなく含んで……。

彼は、彼を取巻く野山のすべてが、あらゆる不合理と矛盾とを
含んだ公式と方程式にみちみちて いる事を直覚した。そうして、
それ等らのすべてが彼を無言のうちに嘲あざけり、脅おびやかしているかのよ
うな圧迫感に打たれつつ、又もガツクリとうなだれて歩き出した。
そうしてそのような非数理的な環境に対して反抗するかのように
彼は、ソロソロと考え始めたのであつた。

……俺は小さい時から数学の天才であつた。
……今もそのつもりでいる。

……だから教育家になつたのだ。今の教育法に一大革命を起すべく……児童のアタマに隠れている数理的な天才を、社会に活かして働くすべく……。

……しかし今の教育法では駄目だ。全く駄目なんだ。今の教育法は、すべての人間の特徴を殺してしまう教育法なんだ。数学だけ甲でいる事を許さない教育法なんだ。

……だから今までにドレ程の数学家が、自分の天才を発見しえず、闇から闇に葬^{ほうむ}られ去つたことであろう。

……俺は今日まで黙々として、そうした教育法と戦つて來た。

そうして幾多の数学家の卵を地上に孵化^{ふか}させて來た。

……太郎もその卵の一つであつた。

……溫柔おとなしい、無口な優良児であつた太郎は、俺が教えてやる
 まにまに、彼独特の数理的な天才をスクスクと伸ばして行つた。
 もう代数や幾何の初等程度を理解していくばかりでなく、自分で
 LOGを作る事さえ出来た。……彼が自分で貯めたバットの銀紙
 で球を作りながら、時々その重量と直径とを比較して行くうちに、
 直径の三乗と重量とが正比例して増加して行く事を、方眼紙にド
 ットして行つた点の軌跡きせきの曲線から発見し得た時の喜びようは、
 今でもこの眼に縋り付いている。眼を細くして、頬ペタを真赤に
 して、低い鼻をピクピクさせて、偉大なオデコを光らしているそ
 の横顔……。

……けれども俺は太郎に命じて、そうした数理的才能を決して

他人の前で発表させなかつた。学校の教員仲間にも知らせないようになつてゐた。「又余計な事をする」と云つて視学官連中が膨れ面をするにきまつていたから……。

……視学官ぐらいに何がわかるものか。**彼奴等**は教育家じやない。タダの事務員に過ぎないので。

……ネエ。太郎、そうじやないか。

……**彼奴**の数学は、生徒職員の数と、夏冬の休暇に支給される鉄道割引券の請求歩合と、自分の月給の勘定ぐらいにしか役に立たないのだ。ハハハ……。

……ネエ。太郎……。

……お父さんはチャント知つてゐるんだよ。お前が空前の数学

家になり得る素質を持つていていることを……。アインスタインにも敗けない位スゴイ頭を持っていることを……。

……しかし、お前自身はソンナ事を夢にも知らなかつた。お父さんが云つて聞かせなかつたから……だから残念とも何とも思わなかつたであろう。お父さんの事ばかり思つて死んだのであろう……。

……だけど……だけど……。

ここまで考えて来ると彼はハタと立ち停まつた。

……だけど……だけど……。

というところまで考えて来ると、それつきり、どうしてもその

先が考えられなかつた彼は、枕木の上に両足を揃えてしまつたのであつた。ピツタリと運転を休止した脳髄の空虚を眼球のうしろ側でジイツと凝視しながら……。

それは彼の疲れ切つて働けなくなつた脳髄が、頭蓋骨ずがいこつの空洞の中に作り出している、無限の時間と空間とを抱擁ほうようした、薄暗い静寂であつた。どうにも動きの取れなくなつた自我意識の、底知れぬ休止であつた。どう考えようとしても考へることの出来ない……。

彼は地底の暗黒の中に封じ込められているような気持になつて、両眼を大きく大きく見開いて行つた。しまいには瞼まぶたがチクチクするくらい、まん丸く眼の球たまごを剥き出して行つたが、そのうちにそ

の瞳の上の方から、ウツスリと白い光線がさし込んで来ると、それに連れて眼の前がだんだん明るくなつて來た。

彼の眼の前には見覚えのある線路の継目と、節穴の在る枕木と、その下から噴き出す白い土に塗まみれた砂利の群れが並んでいた。そこは太郎が轢ひかれた場所に違ひ無いのであつた。

彼は徐おもむろに眼をあげて、彼の横に突立つてゐるシグナルの白い柱を仰いだ。黒線の這入はいつた白い横木が、四十五度近く傾いてい

る上に、ピカピカと張り詰められている鋼鉄色の青空を仰いだ。

そうして今一度、吾兒わがこの血を吸い込んだであろう足の下の、砂利の間の薄暗がりを、一つ一つに覗のぞき込みつつ凝視した。その砂利の間の薄暗がりから、頭だけ出している小さな犬蓼いぬたでの、血より

も紅あかい茎の折れ曲りを一心に見下していた。

……だけど……だけど……。

という言葉によつて行き詰まらせられた脳髄の運転の休止が、又も無限の時空を抱擁しつつ、彼の頭の上に圧しかかつて来るのを、ジリジリと我慢しながら……どこか遠い処で、ケタタマシク吹立ふきたていた非常汽笛が、次第次第に背後に迫つて来るのを、夢うつつのように意識しながら……。

……だけど……だけど……。

と考えながら彼は自分の額ひたいを、右手でシツカリと押え付けてみた。

……だけど……だけど……。

……今まで俺が考えて来た事は、みんな夢じやないか知らん。

……キセ子が死んだのも、せがれが轢ひき殺されたのも……それからタツタ今まで考え続けて来た色々な事も、みんな頭を悪るくしてい
る俺の幻覚に過ぎないのじやないか知らん。神經衰弱から湧わき出
した、一種のあられもないイリュージョンじやないかしらん……。
……イヤ……そなうなんだそなうなんだ……イリュージョンだイリ
ュージョンだ……。

……俺は一種の自己催眠にかかるつてコンナ下らない事を考え続
けて來たのだ。俺の神經衰弱がこの頃だんだん非道ひどくなつて來た
ために、自己暗示の力が無暗むやみに高まつて來たお蔭でコンナみじめ
な事ばかり妄想するようになつて來たのだ。

……ナアーンダ。……何でもないじやないか……。

……妻のキセ子も、子供の太郎も、まだチヤンと生きているのだ。太郎はモウ、とつくる昔に学校に行き着いているし、キセ子は又キセ子で、今頃は俺の机の上にハタキでも掛けているのじやないか。あの大切な「小学算術」の草案の上に……。

……アハハハハハハ……。

……イケナイイケナイ。こんな下らない妄想に囚^{とら}われていると俺はキチガイになるかも知れないぞ……。

……アハ……アハ……アハ……。

彼はそう思い思ひ、スツカリ軽い気持になつて微笑しいしい、又も上半身を傾けて、線路の上を歩き出そうとした。するとその

途端に、思いがけない背後から、突然非常な力で……グワーン……とドヤシ付けられたように感じた。そうしてタツタ今、凝視していた砂利^{バラス}の上に、何の苦もなく突き倒されたように思つたが、その瞬間に彼は真黒な車輪の音も無い廻転と、その間に重なり合つて閃めき飛ぶ赤い光^{こうみょう}明^{じま}のダンダラ縞^{じま}を認めた。……と思ううちに後頭部がチクチク痛み初めて、眼の前がグングン暗くなつて來たので、二三度大きく瞬^{まばたき}をしてみた。

……お父さんお父さんお父さんお父さんお父さん……。

と呼ぶ太郎のハツキリした呼び声が、だんだんと近付いて來た。そうして彼の耳の傍まで來て鼓膜の底の底まで泌^{しあわせ}み渡つたと思うと、そのままフツツリと消えてしまつたが、しかし彼はその声を

聞くと、スツカリ安心したかのように眼を閉じて、投げ出した両手の間の砂利の中にガツクリと顔を埋めた。そうしてその顔を、すこしづかり横に向けながらニッコリと白い歯を見せた。

「……ナアーンダ。お前だつたのか……アハ……アハ……アハ……」

青空文庫情報

底本：「夢野久作全集8」ちくま文庫、筑摩書房

1992（平成4）年1月22日第1刷発行

底本の親本：「瓶詰地獄」春陽堂

1933（昭和8）年5月15日発行

※「氣持」「気持ち」の不統一は底本のママとした。「初め」は「始め」が正しいと思われるが、これも底本のママとした。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：柴田卓治

校正：柳沢成雄

2001年4月19日公開

2006年3月16日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたつたのは、ボランティアの皆さんです。

木魂

夢野久作

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>